

第2章 高鳳蓮初期の剪紙

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

高鳳蓮の初期の作品とは、20世紀80年代中頃から90年代初め頃までに制作された作品を指します。この時期の作品は、単純な題材を写実的に、しかも誇張して表現していますが、画面は素朴で、内容的には人間的な味わいに満ちていて、'生活'と'自然'に密着しています。形式にとらわれず、伸び伸びとして、思うが儘、何の苦も無く切り出しているようです。親しみやすく、優しい作品が多く、人を引き付ける魅力があり、彼女の人柄がにじみ出ています。

初期の頃、高鳳蓮は、十二支を主題としたものを多く制作しています。彼女の動物は形にとらわれず、思い切った構図なのですが、良く特徴をとらえて生き生きとしています。例えば、午年に制作した馬の作品は、四肢を伸ばして疾走する馬、大股で空を駆ける馬、威風堂々とした馬など、どれをとっても見る人の心を浮き立たせてくれるものばかりです。

高鳳蓮の作品には、四角い紙に、模様がいっぱい広がった形式のものが多くあります。折りたたんで剪る時、同じ模様連続の中に、切り抜かれた部分が、放射する光のような効果を上げ、古代の壁画のような雰囲気を見せることもありま



意気盛んな高鳳蓮(2002年)

す。おさげ髪の少女や手を繋ぐ少女などは、特に連結の面白さを意識して切り出しますが、広げてみると、面白い雰囲気の商品が出来上がります。この種の剪紙には名前があって、多くは奇数で繰り返され、「三連は通常、五連は腕白坊主、七連は先祖の祭祀、九連は神々の祭祀」と言われます。

神仏祭祀用の剪紙に対する、高鳳蓮の気持ちは敬虔なもので、日常の中でそれらの剪紙を気軽に剪ることとはなく、勿論販売するために制作することはありません。但し頼まれれば、快く引き受け、祭祀の現場で制作をします。若し近所に病気の子供がでたり、或いは先祖の霊を慰める行事があったりすると、人々は、高鳳蓮に剪紙の制作を頼み、彼女も進んで引き受けるのでした。彼女は真剣に、「こういうものは、気軽な気持ちで引き受けてはいけないのですよ」と話します。その意味は、「祭祀用の剪紙は、神仏に対する敬虔な気持ちを持って制作するもので、関係のない処にやたらに並べては、剪紙に込められた威厳が損なわれます」ということです。

陝北の農村は、剪紙を「窓花」と呼びます。そして、それは大よそ三種類に分類できます。第一



三人の手をつなぐ少女

の種類は、農家の女性たちが手の空いた時に、草や花・動物などを剪り出して、単調な窑洞の入り口や窓に貼り、各家の特色を出して、単調な黄土高原に彩を添えます。第二の種類は、衣服や靴など刺繍の下絵とするために剪られるもので、これも又、色彩に乏しい黄土高原の生活に、華やかさと潤いをもたらします。

第三の種類は、信仰や祭祀にまつわる、宗教的意味合いがあるものです。それらは近くの家の子供の病気快癒を願ったり、厄除けを祈り、被災を慰めるなど、人々の生活に密着したもので干支の剪紙もそれらに属し、毎年、その年の干支に属する人への贈り物としてとても喜ばれます。高鳳蓮のこの時期の作品は皆、この「窓花」と呼ばれるジャンルに属します。

年月は休むことなく歩を運び、数十年の苦勞の果てに、高鳳蓮は子供たちを立派に育て上げ、姑も見送りました。三人の男の子は皆、街に出て、安定した公務員の職に就きました。これは、村ではこれまであり得なかったことで、村人たちの羨望的になりました。村人たちは、白家の墓地の風水が良いからに違いないと話合っていました。三人の女の子も、然るべき家に嫁がせて、安定して落ち着いた生活をさせることが出来、何人もの孫にも恵まれました。これで、高鳳蓮の心境にもゆとりが生じ、経済的にも恵まれて来たので、再び昔のような苦勞をすることはなくなりました。



のんびりと心休まるひと時

娘たちの婚家の人々とも交流し、娘たちはしょっちゅう実家を訪れるので、心楽しい日々が続きました。ところが1984年、思いがけず、高鳳蓮は、今までの幸運が全て消えてしまったと思えるほどの心が潰れるような出来事に遭遇しました。

1984年、突然の悲劇が高鳳蓮の身に降りかかって来ました。この年、彼女の二番目の娘が長女を出産しました。が、出産後、直ぐに次の子供を妊娠しました。出産予定は翌年の初めだったのですが、思いがけず出産が早まり、しかも難産でした。へその緒が胎児に絡まり、どうにか分娩はしたのですが、産後の大出血が起きてしまいました。周りの人々はなす術もなく時間ばかりが過ぎて、その出血のために次女は亡くなってしまいました。衛生知識の乏しい当時の農村では珍しくないことですが、享年二十歳でした。

此の辺りでは、昔から自宅の窑洞で出産するのは当たり前のことで、此の次女のように難産で大出血が起こり、命を落とすケースが比較的多いのです。高鳳蓮は、知らせを聞くと、気が動転し一瞬よろめきましたが、気を取り直し、向い側の丘にある娘の家に駆け付けました。5里の道をいつもの半分の時間で走りましたが、臨終には間に合いませんでした。

高鳳蓮は、陝北の全ての女性同様、母性愛の強い人で、子供たちは夫婦の授かりものであり、子孫につなぐ命と考えています。特に女の子を



次女の家は向かい側の山の上、五里(約2.5km)の道のりです

守るのは母親の当然の義務と考えています。今回の次女の出産に際しても、自宅での出産が終わったら、産後の世話（中国では、産婦は一か月何もしないでゆっくり休み、身の回りの世話を受けるのが普通）をしてやろうと思っていましたが、思いがけない事態が起こってしまいました。彼女の悲しみは大変なもので、一夜のうちに白髪が急に増えてしまいました。

以前の苦しみには立派に立ち向かった高鳳蓮でしたが、今回の不幸は受け入れ難いものでした。これ以後、彼女はすっかり人が変わってしまいました。以前は、いつも勢いが良くて情熱にあふれた人でしたが、この後は口数が少なく、動作もゆっくりになり、他人と話すことも少なくなり、谷を隔てた反対側の村の柏の樹や炊事の煙などを眺めて、静かに座っているようになりました。心の中で、自分が駆け付けるのが遅れて、次女を死なせてしまったと言う自責の念にさいなまれていたのです。

世の中で、子供に先立たれた親の苦しみ以上の苦しみはなく、高鳳蓮はこの陰鬱な気持ちにすっぽりと包まれてしまい、全てが空しく、生きる気力も失ってしまったようでした。この陰鬱な気持ちはそのまま次女の夫に向けられ、数年後に、この夫が再婚する時に彼女が孫娘を引き取りに行ってから、高鳳蓮と娘婿との間の交流は途絶え、全くの他人になってしまいました。此の気の強い女性は、生涯、娘婿を許さず、この時制作した剪紙作品が、彼女の気持ちをよくあらわしています（継母）【このページ上】。

1986年、県内では文化館が主催する剪紙の学習クラスが開催されました。高鳳蓮の子供たち

は、母親にこのクラスに参加して気を紛らわすようにと勧めました。高鳳蓮はこの剪紙の学習クラスで多くの虎の剪紙を制作しました。丁度寅年だ



継母

ったので、四角い剪紙の中に様々な虎が生み出されました。中の一枚は、よく見ると、虎の背中の上には何と、おさげ髪の少女が跨り、虎の腹の下には蓮の花のような雲が浮いているのです。

高鳳蓮は、亡くなった次女の冥福を祈りな

がら此の剪紙を制作し、次女が吉祥の虎にまたがり天国の楽園で楽しく過ごしながら、後から行く高鳳蓮を待っていて欲しいと願ったのです。これはごく普通の剪紙ですが、高鳳蓮の気持ちがこもり、人情味豊かで、見る人を感動させる作品となっています（「雲中奔虎」【このページ下】）。

高鳳蓮は、剪紙の制作という、心の平安を得る道を見つけました。この時期、高鳳蓮は干支を中心に、草花鳥獣・家畜猛獣を剪り出しました。午年に制作したものは、紙の上を疾駆している馬、口に靈芝（吉祥のキノコ）を銜えた馬、振り返って見つめる馬等々、皆力がみなぎり、勇気を与え



雲中奔虎



疾駆する馬

てくれるものばかりです。

構図は、四隅までしっかりと切りこまれ、陰陽のバランスが取れていて、安定感があり、見る人を心地よくしてくれます。陝北地方の馬はほとんどが農耕馬で、鞍を置いた馬の図は見かけません。しかし、高鳳蓮の馬の剪紙の中には、背中に鞍を置いたものがあります。これは彼女の少女時代、実家が豊かで乗馬用の馬が飼育されていた時の記憶に基



振り返る馬-2題

づいているのでしょう。鞍には刺繍が施され、楽しそうに山野を駆けまわっている仔馬の様子が見て取れる剪紙です。

1992年は申年で、高鳳蓮は多くのサルの剪紙を剪りました。が、それらサルは人間味があり、人間の子供の形かサルの形か区別が出来ません。元々、人とサルは近い関係に感じられている所為で、サルを擬人化した孫悟空のイメージは、抵抗なく人々に受け入れられています。

高鳳蓮も又、孫悟空の話を題材に剪紙を制作し、身体を搔くサル、飛び跳ねるサル、いたずら

好きなサル、西王母の蟠桃^{ぼんとう}を盗み食いで得意満面のサル等々が紙の上に剪り出されていて、見る人の口元が思わず緩んでしまいそうです。このページのサルは、生き生きとして可愛い子ザルのシリーズで、それぞれの作品には、いたずらっ子らしい子ザルの表情が表現されています。

^{てのひら} 掌 大の紙で、このような生き生きとした様子を表現するのは、高鳳蓮が最も得意とする処です。



サル-1



サル-2



サル-3



サル-4